

# 幼児教育じほう

年間テーマ

社会と共有する乳幼児期の教育・保育の重要性

特集

2歳児の世界

2026

1



## 実践事例Ⅱ

# 「遊びの根っこ」が育つとき

兵庫県 芦屋市立精道こども園  
保育教諭 田中 愛子

### ●はじめに

本園は芦屋市立精道保育所と精道幼稚園が統合し、幼保連携型認定こども園として開園して七年目となる。市立の認定こども園・保育所では、共通の理念・方針・目標のもと「生きる力の基礎」の育成に重点を置き、〇歳児から五歳児までの発達の連続性を踏まえた教育・保育を行っている。

二歳児は生活に必要な習慣を身に付けていく大切な時期である。着替え、食事、排泄などは、月齢による個人差に加え、そのときの心情による影響も大きく、一人一人に寄り添った援助が欠かせない。そこで本園の二歳児クラスでは、生活面は同じ保育者による担当制とし、継続的に関わりながら信頼関係を築き、個々の要求に寄り添うことを大事にしている。生活面を丁寧に援助して自立に導くことは、遊びの時間をより長く保障することにつながると考えている。

遊びの時間は担当制ではなく、クラス全体の十五名の子どもに対して保育者三名が関わり、援助している。室内環境の構成においては、遊びごとにコーナーをつくって空間を保障し、子どもたちが自分のしたいことを選び、自ら関わって遊ぶことを重視している。また、操作したりイメージをもって遊んだりできるような手作りの遊具を意図的に多く用意している。

## ●事例1●「並べる」から「見立てる」へ

二歳児 四月から六月

一歳児の頃に、チェーリングや俵型お手玉などの遊具を並べて遊んでいた子どもたちが、二歳児になり、それらを見立てて遊ぶようになってきた。「ケーキできたよ、食べて」と言う子どもの隣には、お手玉を様々な形に並べ「パンできた」と笑みを浮かべる子ども。その隣には、細長い俵型お手玉を円形フェルトで包み並べる子どもがいる。別のコーナーには、段ボール箱に紐ひもを付けて作った箱車と、ジュースパックを凹型に組み合わせ足蹴り車を置いている。

箱車は、中に入ったり、紐を持って引いたりするなど、各々が気に入った遊び方をして楽しんでいる。箱車の



中に大きな積木を入れ、紐の部分を足蹴り車に引く掛けると、たちまちトラックになり「お家作るの」と工事が始まる。人形を乗せると、「公園行ってくるね」とベビーカーになる。

この事例からは「シンプルな形の遊具」や「二歳児が扱いやすい大きさの遊具」がイメージや動きを引き出し、様々な物に見立てて遊ぶ姿につながっていることが考察される。

このほかに、二歳児が見立てて遊ぶことを楽しめるような環境として次の二点を意識している。

### ①見立てを楽しむ余地を残す

丸いフェルトの両端にスナックボタンが付いている手作り遊具を、ままごとコーナーに置いておくと、中に物を詰めて半分に折り、餃子ぎょうざやクレープなどの食べ物に見立てた遊びが出てくる。中に入れる物を変えると、ホットドッグになることもある。二歳児にとって身近で知っている物を想像できるような余

地があると、見立てて遊ぶことが促される。

② 一歳児から二歳児への発達の見通しをもつ

長いチェーンリングは、一歳児では並べたり穴の開いた容器に入れたり出したりして遊ぶことが多い。こうした遊びを繰り返して楽しんだ子どもは、二歳児になり手指操作が発達してくると、渦巻きを形作るなど様々な表現をするようになり、身近な物を使って自分のイメージした物を表す姿につながっていく。

見立て遊びが多く見られるようになる頃に、環境に具体物を用意すると、再現遊びが盛り上がることもある。例えば、シャンプーボトルがあると、人形を風呂に入れたり、脱がせた服を洗濯して干したりする動きが出てくる。具体物をエッセンスとして取り入れるタイミングは、保育者が子どもの遊びを見て読み取り、その瞬間を見極めることが大切である。

## ●事例2●「貸して」「いいよ」だけが正解？

二歳児 六月

A児が電車の遊具を長くつなげて遊んでいる。長くつないだ電車を動かしてカーブさせると、連なった電車が曲線を描いて動き、A児はその様子をうれしそうに眺めていた。

A児が遊ぶ様子を見ていたB児は、保育者のそばに来て「Aちゃんが貸してくれない」と訴え、電車で遊びたいという思いを表す。保育者が「Aちゃんに貸してって言ってみたら？」と返すと、B児は「Aちゃん、電車貸して」と言う。A児は「後でね」と答え、遊び続ける。B児は保育者に「後でだって」と報告に来る。保育者が「今は遊んでいるから後で貸してくれるんじゃない？」とB児に伝えると、少し曇った表情を見せながらも、積木で遊び始めた。

しばらくすると、A児が「はいどうぞ」とB児に電車を渡しに来た。B児はA児から電車を受け取り、A児と同じ場で一緒に遊び始めた。

A児が遊ぶ姿からは、たくさん並べて電車を走らせることを楽しんでいることが分かる。A児に「Aちゃん、たくさん使っているからBちゃんに貸してあげたら?」と声を掛けることもできるが、その結果電車をB児に貸す行為が見られたとしても、A児にとっては「先生が言ったから貸した」という経験となり、保育者がルールとなつてしまふ。自我が強くなると言われる二歳児は、自分の意思を言葉や動きで表すことができるようになってくる時期でもある。だからこそ「保育者がルールとなる」のではなく、「自分で決める」ということを大事にしたいと考え、保育者は仲立ちをすることをあえて避けた。本事例では、時間を置いた後にA児が自分からB児に電車を貸す姿が見られた。振り返って考察すると、このタイミングは、A児が遊びに満足したときだったのかもしれないし、B児と一緒に遊びたいと思ったときだったのかもしれない。言葉の表現はまだ拙い時期であるため、行動の背景にある思いに気持ちを寄せ、理解に努めることが求められる。

## ●おわりに

現代を生きる子どもたちの周りには、自らが積極的に環境に関わったり働き掛けたりせずとも遊ぶことができるツールも多く存在する。だからこそ、乳幼児期には、子どもが自ら人や物に関わって遊びを生み出す体験を重視し、遊ぶ力の根っこを育てたい。保育者が想定していなかった遊びを子どもが体現したときも、そこには子どもの思いが表れていると考え、その思いに答えられるような保育者でありたい。二歳児の時期に「自分の思いや遊びを大切にしてもらった」という経験は、三歳児以降の幼児期の遊びにおいて「面白そう」「こんなことをしてみたい」と興味や関心を広げ、「やってみよう」という意欲につながっていくと考える。乳児期に「遊びの根っこ」が張っていくよう支え幼児期につなぐことは、本市の保育理念である「生きる力の基礎」を育み、子どもの未来をより豊かなものにしていくと考えている。